

金ごうず

むかしむかし、室見川の中ほどのとある村に

働き者で無欲なおじいさんとおばあさんが住んでおりました。

ふたりはわらむしろを作って売っていましたが、

そんなに売れもせず貧しい暮らしぶりでした。

でも愚痴ひとつこぼさず、いつも仲睦まじく暮らしておりました。

秋も過ぎていき、お正月が近づいていました。

「正月もお供え餅が、どげんかなりや良かつちゃけどなあ、おばあさん」

そんなある日のこと。

町にむしろ売りに行ったおじいさんが、売れ残りのむしろを背負って

橋の上まで来た時でした。

「正月どんな来たれども、年（としゃ～）何でとろうかいな。」

と、つい、つぶやいてしまいました。すると、

「お米でとりゃれ」

橋の下の方から、きれいな声が聞こえてきました。

おじいさんは不思議に思って、橋の下の川をのぞきこみながら、もう一度、

「正月どんな来たれども、年は何でとろうかいな。」と言うと、

「お米でとりゃれ」

澄んだ美しい声でした。

おじいさんは橋の下におりて、

きょろきょろとしながら、もう一度言ってみました。

「正月どんな来たれども」

「お米でとりゃれ」と、はっきり聞こえました。その時、

「あっ！」おじいさんは驚きました。

石の上に金色に光る小さなごうずがいたのです。

「あちゃ～、お前かい？しかし、な～んとかわいらしか、な～んときれいかごうずかいな。」

近よって手を差しのべると、ごうずは手のひらにはい上がってきました。

「おう、よしよし、かわいかのう。」

おじいさんは、目を細め、金色に光るごうずの背中を何度もやさしくなでてやりました。

おじいさんは、家に帰るとさっそく、おばあさんに金ごうずを見せました。

おばあさんもたいそう喜びました。

「かわいかのう、かわいかのう。」

「正月どんな来たれども、年は何でとろうかいな」「お米でとりゃれ」

こんなに美しく、ましてや物を言うごうずは見たことはありません。

二人は次の日に庄屋さまの所に見せに行くことにしました。

庄屋さまのお屋敷では、すっかり正月の準備もできあがっていました。

二人は、おそろおそろ金ごうずを庄屋さまの前に差し出しました。

「正月どんな来たれども、年は何でとろうかいな」

「お米でとりゃれ」

庄屋さまは、びっくり仰天です。

金ごうずをじっと見つめていたかと思うと、

「わが家ん宝にしますけん、ぜひ、ぜひ、ゆずってくだされ」と言いました。

庄屋さまの熱心な頼みに、「よかですよ、庄屋さま」と、ふたりは快くゆずることにしました。

「こげんにたくさんの頂き物、ありがとうございます、

それでは庄屋さま、良いお年を」

家にかえると、さっそくおばあさんが餅米を蒸し、

おじいさんは臼と杵を引っ張り出しました。

その夜、ふたりの家からはお餅をつく楽しそうな音が、ひびいていました。ぺったん、ぺったん、もひとつ、ぺったん

お正月はもうすぐです。